

# 座間キャンプ史跡めぐり



**陸軍士官学校正門** 正門から学校本部を望む。昭和15年ごろ。

## 陸軍士官学校

座間キャンプとその周辺には、旧大日本帝国陸軍士官学校関係の古い石碑が数多くあります。これらは主として同校の職員や学生たちが昭和 12 年 9 月から第 2 次大戦が終結した昭和 20 年 8 月までに建立したものです。

陸軍士官学校は、旧帝国陸軍の中心的な軍事教育機関で、陸軍の中核になる将校を育成しました。その歴史は古く、明治天皇が徳川幕府より統治権を取り戻した明治元年の初頭に、京都の延臣の子弟に軍事教育を与える兵学校として始まりました。その後、諸藩の藩士を生徒として受け入れ、規模が大きくなるにつれ、京都から大阪へ、そしてその後東京へと移転しました。

明治 7 年に政府は陸軍士官条例を制定し、市ヶ谷にあった旧尾張藩主徳川邸跡に校舎を建て、翌年 1 月に開校の運びに至りました。当初はフランス式の軍事教育を行っていましたが、晋墮戦争、晋仏戦争でドイツが勝利を治めてから、陸軍は戦勝国ドイツに倣うことに方針を変え、士官学校の教育も明治 17 年以来ドイツ式になりました。

大正 9 年の一般教育制度の改正に伴って、陸軍士官学校は従来の 9 月からの入学期を 4 月に変更し、その教課を 2 ヶ年の予科及び 6 ヶ月の連隊勤務を含めた 2 ヶ年余りの本科に改正しました。

予科課程の入学者は、16、7 歳の陸軍幼年学校の卒業者または旧制中学校の 4 年修業者でした。予科では生徒たちは通常旧制高等学校の 1、2 年で履修する一般教養科目と日本古来の武術や馬術を含む基礎的な軍事科目を習得しました。

平時には、約 4 年半で予科と本科を終了し、卒業生は直ちに見習士官になり、兵種に応じて各連隊に配属されました。そして 3 ヶ月の実習の後に少尉に任官しました。しかし戦時には、士官学校の養成期間は短縮され、生徒数は増加されました。

昭和 6 年 9 月に、満州事変が勃発し、戦局が拡大するにつれ、陸軍は中国大陸に多数の将兵を送り出しました。昭和 10 年頃にはその数は 100 万人にも達し、指揮官の養成が急がれました。昭和 12 年に、陸軍省は士官学校の生徒数を増やすために、予科と本科をそれぞれ独立させ、更に本科を地上兵科と航空兵科に分けました。その結果、市ヶ谷校舎は陸軍予科士官学校になりました。しかし市ヶ谷もすぐに手狭になったので、埼玉県の朝霞に移転しました。本科は陸軍士官学校と改名され、地上兵科は神奈川県の座間へ、航空兵科は埼玉県の所沢へ、次いで豊岡へと移転することになりました。

昭和 12 年 9 月 30 日に第 50 期の生徒たちは市ヶ谷から座間に移動し、卒業年度の 3 学期の勉強を始めました。

士官学校の生徒の一日は、夏期は午前5時半に、冬期は6時の起床ラップで通常始まりました。授業や訓練は午前7時半もしくは8時から午後4時までで、それ以降6時の夕食までの時間は課外活動や自習にあてられ、夕食後7時から9時まで再び自習の時間があり、9時半の消灯ラップで一日が終わるという規則正しい日課でした。

座間の北キャンプには、主として士官候補生の宿舎や講堂があり、南キャンプには主として外国人留学生などの宿舎や講堂がありました。（キャンプ内の三州瓦の屋根の建物は士官学校時代のものです。）

新校舎での生活は、50期生にとって楽ではありませんでした。建物の完成は見たものの、校舎や演習場は未整備のため、生徒たちは演習中に桑の木の切り株などで怪我をしたり、雨の日には校庭のぬかるみに足を取られるなど、大変だったようです。

そのような状況にもかかわらず、426名の50期生は3学期を座間で終え、昭和12年12月20日に天皇陛下のご臨席のもとに卒業式を迎えることになりました。

当日、陛下は座間の士官学校の所在地を相模の文武鍛錬台地とお考えになり、「相武台」と命名なさいました。その後、周辺の地域も御命名に因んだ地名に改名され、駅名も「相武台前」や「相武台下」などとなりました。（当時の座間は一寒村にすぎませんでした。陛下の行幸を記念して同日付けで町制を施行しています。）

士官学校の開校に続いて、隣接の相模原に大規模な陸軍の軍事施設が次々と建設されました。それらは相模造兵廠（現在は米陸軍相模総合補給廠）、通信学校（現在は相模女子大学）、電信第一連隊（現在は米陸軍相模原家族住宅地区）、2つの陸軍病院（現在は国立病院機構相模原病院、及び旧米陸軍医療センター）、機甲整備学校（旧米陸軍キャンプ淵野辺）などでした。これらの学校や施設の共同演習場は、士官学校の演習場の隣に造成されたので、両方を使用して士官学校の生徒たちも参加した合同演習がよく行われました。

中国大陸での戦場が拡大するにつれて、相武台校でも生徒数が急増されました。昭和12年には426名だった生徒数は、昭和20年には4倍強の1,824名に増えていました。そして2年の教育課程は1年2ヶ月に短縮され、休日にも授業が行われました。

士官学校の同窓会である偕行社には、昭和12年から20年の9年間に18,476名の士官候補生が相武台の地上兵科を卒業し、8,956名が豊岡の航空兵科を卒業したという記録が残されています。この合計数は、市ヶ谷の士官学校が63年間に養成した総数の22,585名を遥かに超えています。

相武台では、本科候補生教育の他に、ビルマ、中華民国、朝鮮、満州、東南アジアからの留学生も受け入れており、その数は9年間で600名以上にもなりました。更に、特

別な将校養成課程もあり、約 8,500 名の予備役将校や下士官が戦場での指揮官となるために訓練を受けました。

戦時下の青年たちの心情や考えは彼らの残した手紙や日記等からうかがい知ることができます。最も顕著なものは、「祖国のためにいかに戦い、いかに死ぬか」ということでした。過酷な訓練中にも最善を尽くすという熱意のあまり、20 名もの生徒が殉職しました。無事に卒業ができた残りの 20 歳になるかならずの青年たちは卒業記念碑を建て、戦場に赴いたのです。

戦局が厳しくなるにつれ、休日はなくなり、週末にも授業が行われました。昭和 20 年 4 月には空襲で職員と生徒の中から若干の死傷者が出ました。また、授業も空襲でしばしば中断されました。

6 月には連合軍の激化する空襲と本土上陸に備えて、士官学校は職員と約 3,000 名の生徒を長野県の山村に疎開させました。現在「チャペル ヒル」と呼ばれている丘にあった雄健神社のご神体も長野県に移され、相武台には校舎を管理する小部隊だけが残されました。士官学校の職員と生徒は、長野県の疎開先で日本が 8 月 15 日に連合軍に無条件降伏をしたことを知らされました。彼らは 8 月 30 日にそれぞれの出身地に復員しました。

相武台は、昭和 20 年 9 月 5 日から米陸軍第一騎兵師団の一個大隊の管理下におかれました。ついで、米陸軍の第四兵員補充基地になりました。後に相武台の基地は「座間キャンプ」と改名され、厚木基地と共に極東区域に移動する将兵の中継地点となりました。

昭和 27 年には、火事で南キャンプにあった旧士官学校の建物が 5 棟焼失しました。当時、極東米陸軍司令部は横浜の繁華街にあり、郊外に移転地をもとめていました。その候補地として南キャンプの焼け跡が挙げられ、司令部の移転先として選ばれました。

現在のペンタゴン（米国防省ビル）をかたどった司令部の建物は、昭和 28 年に完成し、以降在日米陸軍司令部として使用されています。

朝鮮動乱の勃発後、座間キャンプは陸軍の中継基地として再び活動し始め、朝鮮に向かう第一騎兵師団、第七、第二十四、第四十歩兵師団の将兵の支援で多忙を極めました。

米陸軍が相武台に駐屯後、米国人の生活様式に合うように旧士官学校の施設は内も外も改築され、保存強化されたので、当時の建物は現在もかなり使用されています。

雄健神社の森の木は切り倒されて、チャペル ヒルという住宅地に変わりました。天皇陛下がお立ちになった演習場はゴルフコースへと変貌しました。田中士官候補生の慰霊碑のある丘は、昭和 29 年に米陸軍の飛行場になりました。

昭和 40 年代には、ベトナム戦争の激化に伴い、兵器の修理、補給に追われた相模補給廠や、多数の負傷兵の治療にあたった相模大野の陸軍病院と同様に、座間キャンプも戦場から送られてきた将兵の休養基地として活躍しました。

昭和 45 年 10 月に座間キャンプは日米共同使用基地になり、陸上自衛隊の第 102 建設大隊とその支援部隊が駐屯するようになりました。自衛隊の再編成で、同建設大隊は翌年第三施設群となりました（現在は第四施設群に再編）。昭和 57 年には「山桜」と命名された日米合同演習が始まり、それ以後毎年行われる合同演習を通じて、在日米陸軍と陸上自衛隊は友好的な協力関係を深めています。

これまで座間キャンプに赴任した歴代の米司令官や自衛隊の司令は、旧士官学校の記念碑の保存維持に特に注意を払ってきました。これらの記念碑が戦後長きにわたり良い状態に保存されているのも、ひとえにこれらの日米関係者の努力の賜物といえるでしょう。また戦後まもなく士官学校ゆかりの人々が座間キャンプを再訪できるようになったのも、米軍側の配慮によるものでした。彼らが座間キャンプで真っ先に目を留める場所は、北キャンプ正門の右手にある相武台の石碑でありましょう。

（このガイドブックは、士官学校の卒業生である大島勝之氏、古閑良裕氏、及び偕行社の最上貞雄氏のご協力により収集された当時の資料に基づき作成されました。）

## 目次

1. 「相武台」記念碑.....	7
2. 「誠」石碑.....	8
3. 「和」石碑.....	8
4. 「三紀会」卒業記念碑.....	9
5. 第22期少尉候補者学生卒業記念碑.....	9
6. 第56期本科生卒業記念碑.....	10
7. 第21期少尉候補者学生卒業記念碑.....	10
8. 第50期生卒業記念碑.....	11
9. 第2期予備役将校学生卒業記念碑.....	11
10. 第1期将校学生卒業記念碑.....	12
11. 第51期生卒業記念碑.....	12
12. 第52期生卒業記念碑.....	13
13. 天皇陛下用防空壕.....	13
14. 第53期生卒業記念碑.....	14
15. 雄健神社鳥居.....	14
16. 第59期生在校記念碑.....	15
17. 第58期生卒業記念碑「七生報国」.....	15
18. 第57期生記念標識.....	16
19. 方位石.....	16
20. 第24期生任官30周年記念碑.....	17
21. 第22期生任官30周年記念碑.....	17
22. 皇族子弟用宿舍跡（日米友好親善碑）.....	18
23. 「奮忠」第54期生卒業記念碑.....	18
24. 「殉難 軍馬の碑」.....	19
25. 「留魂」田中山碑.....	19

## 1. 「相武台」記念碑

この石碑は旧士官学校の記念碑の中で最大のものです。第50期の卒業大演習と式典にご臨席なされるために、昭和天皇が士官学校の新校庭に初めて行幸なされた際、陛下は陸軍大臣の杉山元大将に当地を「相武台」と呼ぶようにと仰せられました。この名前は古事記に載っている日本武尊（やまとたけるのみこと）の故事に因んだものです。

士官学校に相応しい石を見つけるのと、文字を彫るのに時間がかかり、命名碑が建てられたのは2年後の昭和15年でした。記念碑の「相武臺」の3文字は、杉山大将が自身で毛筆で書かれたものを拡大し、石に刻んだものです。

この石碑は昭和20年に、連合国軍に破壊されることを恐れた当時の士官学校の関係者により地中に埋められましたが、2年後の昭和22年、横浜に駐屯していた第8軍の司令官だったロバート L. アイケルバーガー中將の命令で掘り出され、現状に復されました。



## 2. 「誠」石碑

相武台碑の前に、漢字が一字ずつ彫られた自然石が置かれています。左側の「誠」の碑は、昭和49年の5月に旧士官学校の第55期生の生存者が、亡くなった同期生の霊を慰めるために建てたものです。2,349名の第55期生（昭和13年12月～昭和16年7月）のうち953名が戦死されたり、戦後国外の捕虜収容所で亡くなりました。



## 3. 「和」石碑

右側の「和」の碑は、昭和57年10月10日に第60期生の総会を記念し、世界の平和を願って建てられたものです。陸軍最後の士官候補生となった60期生は全部で4,704名で、昭和19年3月から昭和20年8月まで在校しました。彼らは疎開先の長野県の野営地で終戦を迎えました。



#### 4. 「三紀会」卒業記念碑

相武台記念碑の左右と後ろに角柱形の小さい石碑が9本立っています。それらは全部卒業記念碑です。正面には卒業生の期が、裏には卒業年月日が彫ってあります。

「和」の碑の右にある松の木立の中に、二段重ねになった「三紀会」の卒業記念碑があります。上部の碑は第3期特別将校養成課程を昭和17年10月から受け、翌18年10月に修了した181名の予備役将校学生が、同年10月15日に建てたものです。その後、昭和51年9月18日に生存者たちが座間で再会し、戦没同期生69名の冥福を祈って卒業記念碑を再建しました。



#### 5. 第22期少尉候補者学生卒業記念碑

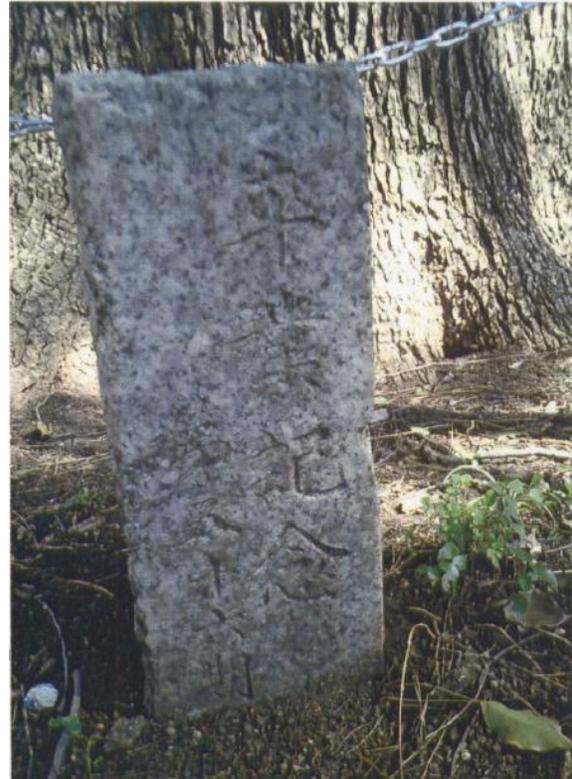
「三紀会」の碑から反時計回りに歩いていくと、第22期少尉候補者課程に昭和16年11月に入学し、昭和17年9月17日に卒業すると直ちに戦地に赴いた481名の下士官学生が建てた碑があります。



## 6. 第56期本科生卒業記念碑

三番目の記念碑は、昭和14年12月から17年12月まで士官学校で訓練を受けた第56期の本科生が建てたものです。地上兵科の卒業生数は1,672名で、航空兵科は627名でした。この航空兵科卒業生等が敵船や敵機に自分の飛行機ごと「体当たり」する攻撃戦法を編み出しました。若い航空士官等は、昭和19年10月にマレー半島付近のアンダマン海にあるニコバルー島上空で敵機に遭遇した時に体当たり攻撃を実践しました。そして「神風特別攻撃隊」と呼ばれるようになりました。

この戦法で戦死した操縦士不足を補うために、地上兵科卒業生のうち257名が航空兵科の訓練を受け、操縦士になりました。総計884名の操縦士のうち545名が第2次世界大戦中に戦死したので、同期の地上兵科卒業生の戦死者数を加えると、56期生は2,299名中1,071名が戦死したことになり、他の期と比べて56期が戦死者を一番出したこととなります。



## 7. 第21期少尉候補者学生卒業記念碑

4番目の碑は、第21期少尉候補者課程に昭和15年12月に入学し、昭和16年9月30日に卒業した267名の下士官学生が建てました。



## 8. 第50期生卒業記念碑

5番目の、ちょうど相武台記念碑のうしろにある碑は、昭和9年4月に入学し、昭和12年12月20日に本科を卒業した第50期生が建てました。この期の学生は、相武台で卒業前の3ヶ月しか過ごしていません。466名の卒業生のなかで、176名が戦死しました。



## 9. 第2期予備役将校学生卒業記念碑

6番目の卒業記念碑は、2年の将校課程を1年で修了した90名の第2期（昭和16年11月～17年9月）予備役将校学生が現役に復帰する前に建てたものです。



## 10. 第1期将校学生卒業記念碑

7番目の記念碑は、教会の西の角にあり、第1期将校学生課程（昭和15年10月～16年10月）の卒業生51名によって建てられました。この期の予備将校についてはあまり知られていません。



## 11. 第51期生卒業記念碑

8番目の角柱型の記念碑は、第51期生（昭和10年4月～13年12月）によって建てられました。506名の卒業生のうち、176名が第2次大戦中に戦死しました。



## 12. 第 52 期生卒業記念碑

9 番目の卒業記念碑は、昭和 14 年 9 月 9 日に 635 名の 52 期生（昭和 11 年 4 月～14 年 9 月）により建てられました。昭和 20 年 8 月までに 245 名が戦死しています。彼らが在学中に予科と本科の課程が戦時体制に改定され、全ての外国語の授業は実践的な軍事教科に切り替えられました。また訓練期間も 48 ヶ月から 36 ヶ月に短縮されました。



## 13. 天皇陛下用防空壕

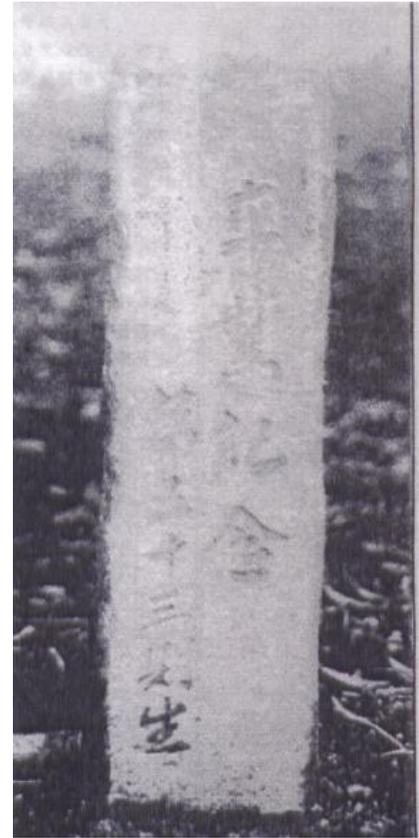
次の歴史的な記念建造物は、昭和 17 年に造られた天皇陛下用の防空壕です。壕の入り口は基地の映画館（旧士官学校大講堂）裏の 506 号小屋の右側にあります。壕内には約 17 メートルの曲がりくねった通路があり、天井の高さが 2 メートル、広さが 30 平方メートルの部屋に通じています。鉄筋コンクリート造りの壕の壁の厚さは 70 センチで、天井の厚さは 1 メートル 70 センチです。その部屋には通路がもうひとつあり、その出口はチャペル ヒルのそばにあります。

昭和 12 年から 20 年までに士官学校で 9 回の卒業式が開かれてきましたが、その内 7 回の式に天皇陛下はご臨席なされました。しかし、その際にこの防空壕はご使用になられませんでした。陛下は 51 期の式にはご病気のため、58 期の式には首都圏空襲のため、ご名代を遣わされました。



## 14. 第53期生卒業記念碑

コミュニティーセンター付近に第53期生（昭和12年4月～15年2月）の建てた記念碑があります。当初、53期の定員は1,050名でしたが、7月に日中戦争が起こり、8月に800名が追加募集されました。さらに士官学校は課外活動を削減して、その訓練期間を48ヶ月から34ヶ月に短縮しました。戦局が緊迫してきた昭和15年6月には、士官学校では休暇中に候補生たちが飲酒するのも禁じました。1,710名の卒業生のうち、800名の将校が日中戦争と第2次世界大戦で戦死しました。



## 15. 雄健神社鳥居

コミュニティーセンターとカルチャーセンターの間に、チャペルヒルに通じる小道があります。その道沿いに士官学校関係の碑が4つあります。

そのなかで一番大きいのは石の鳥居です。それは旧士官学校に祀られていた雄健神社の木製の鳥居を復元したものです。チャペルヒルにかつて鎮座した神社には、国に命を捧げた同窓生の靈魂と天照大御神と他の建国の三神が合祀されていました。

現在の鳥居は、昭和60年12月8日に15,000名の偕行社の会員とその家族によって再建されたものです。



## 16. 第59期生在校記念碑

白い文字の記念碑は、第59期生（昭和18年4月～20年8月）により、昭和61年9月に建立されました。合計2,850名の候補生のうち、1,600名は本科の地上兵科生で、終戦を長野県の野営地で迎えました。

同期の所沢航空学校の本科生は実践技能訓練を当時満州で受けていました。昭和20年8月にソ連が参戦した時、満州にいた候補生たちを全員一度に日本に送り返すことができず、約100名の候補生は2回目の輸送機を待つため、現地に残留させられました。半日後、ソ連軍の進出を受け、彼らは捕虜としてシベリアの収容所に連行されました。多くの候補生がシベリアで死亡し、生存者が日本に帰国できるまでに4年の月日を要しました。



## 17. 第58期生卒業記念碑「七生報国」

鳥居のそばに「七生報国」と刻まれている記念碑があります。それは、士官学校最後の卒業生になった第58期生（昭和17年4月～20年7月）によって建立されました。

2,395名の学生が本科生となった頃、日本の都市は頻繁に空襲を受ける様になりました。相武台も4月に空襲を受け、数人の教官や候補生が死傷しましたが、空襲中にこの期の対空射撃本科生が敵機を撃墜した事もあります。彼らは校内で初めて実践に参加した士官候補生です。彼らは6月に卒業しましたが、大部分の者は日本がすでに制空権と制海権を失っていたので、外地の戦闘部隊に合流する事が出来ませんでした。その結果、他の期の候補生と比べると戦死傷者の数は少なく、90名に止まっています。

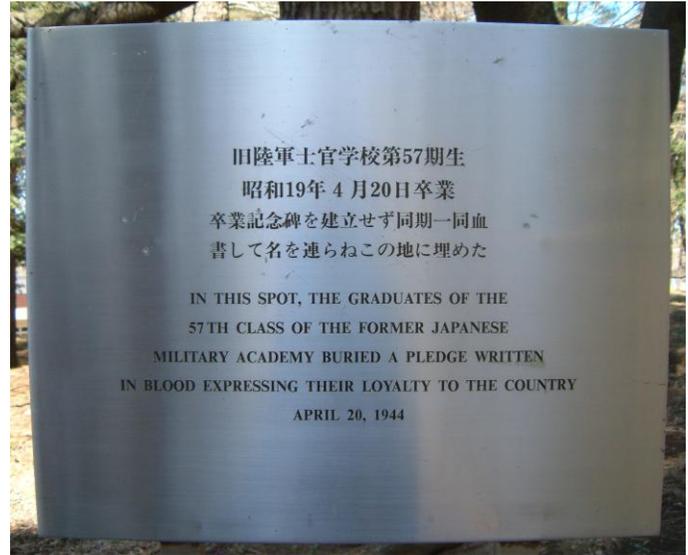


## 18. 第57期生記念標識

鳥居から10メートルほど先の左側に第57期（昭和16年4月～19年4月）の記念標識があります。19年4月20日の卒業の日に、57期生は儘忠報国を誓い合い、連名で血判状をしたため、そこに埋めました。

彼らの中には、連隊で戦闘訓練を受けている最中に、実践を体験した者もいました。また、航空操縦教育を修了した者は志願して特攻隊員になりました。彼らは爆弾を抱いて片道分の燃料しか持たず、目標に向かって二度と帰らぬ攻撃に、基地を飛び立って行ったのです。

1,034名の航空兵科卒業生中、339名が戦死しました。また1,268名の地上兵科卒業生中351名が終戦までにビルマ、フィリピン、ニューギニアなどの東南アジアで戦死しました。



## 19. 方位石

かつて雄健神社が建っていたチャペルヒルにある住宅の右手に空き地があります。そこには長さ2.7メートル、幅2.3メートル、高さ60センチの巨石があり、その上部に円形状のくぼみがあります。以前、そこには大理石の方位盤が埋め込まれ、その盤面には皇居、明治神宮、伊勢の皇大神宮、その他陸軍司令部の所在地名と方向を示す矢印が刻み込まれていました。

士官候補生たちは、毎朝この方位石のところで皇居に向かって遥拝し、また明治神宮や伊勢の皇大神宮の大祭日には国家の安泰を祈念しました。

士官学校の南地区（現在の南キャンプ）の丘にも同地区の生徒用に同じ方位石が設置されました。現在この丘は座間市富士山公園の一角になっています。

方位石は現在座間市教育委員会によって保存され、それには文字と矢印のある大理石の方位盤の一部が残っています。



## 20. 第24期生任官30周年記念碑

鳥居とレクリエーションセンターの間にある小さな林の中に、3つの碑があります。

平らな石の台の上にある小さな角柱型の碑は、第24期（明治43年12月～45年5月）の卒業生が日本帝国陸軍の将校任官30周年を記念して昭和17年に建立したものです。



## 21. 第22期生任官30周年記念碑

もう一方の垂直の平らな石碑は、第22期（明治41年12月～43年5月）の卒業生達がやはり、日本帝国陸軍の将校任官を記念するために、昭和15年に建立したものです。

その際、石碑の近くに銀杏の記念樹も植えました。

これらの先輩は、市ヶ谷の士官学校の卒業生でしたが、本科のある相武台の士官学校を自分たちの母校とみなしました。



## 22. 皇族子弟用宿舎跡

3番目の石碑は、鳥居とレクリエーションセンターの間にあります。そこには士官学校に入学してくる皇族子弟用の2階建ての宿舎が建てられていたのですが、その方々は一般の候補生と一緒に生活なさることを望まれたので、実際にはほとんど使用されませんでした。

由緒ある建物を役立てるために、日米関係者の合意の末、昭和51年に陸上自衛隊座間分屯地第三施設群の手で慎重に分解され、かつて陸軍予科士官学校の所在した埼玉県朝霞駐屯地に移転されました。そして自衛隊の努力で昭和53年10月3日に「相武台史料館」として再び陽の目を見ることとなりました。

この皇族舎跡に第三施設群及び在日米陸軍本州駐屯地部隊がこの日米友好親善の石碑を昭和52年4月6日に建てました。



## 23. 「奮忠」第54期生卒業記念碑

現在の北座間キャンプのヤノ体育館駐車場の隅に、第54期（昭和12年12月～15年9月）の卒業生が建てた記念の石碑と楠があります。楠が植えられたのは、それが武にたけ、智将だった楠木正成公と同名だったからです。彼らは南朝の第96代の後醍醐天皇のために忠節を尽くし、討ち死にした楠木公を心から愛したのです。

これらの若き第54期生達は、卒業に際して楠木公のように国に尽くすことを誓い合い、楠を植樹し、「奮忠」の2文字を刻んだ石碑を建てました。終戦時まで、卒業生2,186名のうち、891名が戦死しました。



## 24. 「殉難 軍馬の碑」

現在のデューイー パークにある釣り堀の東端にある記念碑は、昭和19年10月25日に士官学校で発生した厩舎の火事で焼死した64頭の軍馬を偲んで、当時の馬丁たちが建立しました。厩舎には多数の馬が候補生の乗馬訓練用に飼われていました。「殉難 軍馬の碑」の裏側には3名の建立発起人の名前が刻まれています。



## 25. 「留魂」田中山碑

相武台の旧陸軍士官学校にゆかりのある最後の碑は、田中宏士官候補生が昭和17年5月21日の演習中に死亡した場所にあります。その碑は自然石で、現在の米陸軍航空隊飛行場の西側の林の中にあります。

その慰霊碑には、「留魂」と「田中山」の文字が刻まれています。



旧士官学校当時の古い建物は、時の経過と共にほとんど改築されましたが、同校の歴史を物語る記念碑は、在日米陸軍座間キャンプ、偕行社、ならびに陸上自衛隊第四施設群により、大切に管理され保存されています。これらの記念碑がある限り、座間キャンプは士官学校の卒業生の心の中で母校として生き続けることでしょう。